

BRUNO TAUT

若手建築家による展示コラム

木製伸縮自在本立て

坂根 みなほ

一見、分厚い本のようにも見える、木製の本立て。背表紙もあり、その反対側も、丁度開きかけた本の小口のようにギザギザになっています。本をめくるように開いて左右に引っ張ると、模様だと思っていた木のパーツがみるみる解けて、全てのパーツを伸ばしきると、幅の広い本立てになります。それぞれのパーツによって色や木目が少しずつ違うのは、異なる種類の木を使っているのでしょうか、組み木細工のような美しさがあります。広げてもまたスムーズに戻せるのは、パーツに掘られた繊細な溝がガイドになっているおかげです。使われている金物は細い蝶番と、小さなマイナスネジだけです。開きかけの姿も美しく、オブジェのように部屋に飾られていても違和感のない工芸品と言えます。使われない時はすました顔をして本になりすましていますが、そこに隠されたからくりを見つけた人は驚きに満ち溢れるでしょう。

かつてタウトは桂離宮について、「機能のすぐれているものは、その外観もまたすぐれている」と語りました。そして、そうしたものは機能を果たさなくても美しさは損なわず、存在し続けると考えていました。この本立

てを見ても、機能がすぐれていることはもちろんですが、オブジェとしてもどこから見ても美しく、日本の職人技術の可能性を見出そうとした、タウトの姿勢を感じることが出来ます。設計者とつくり手がお互いに刺激し合いながら新しいものを生み出す瞬間は、ものづくりの醍醐味です。そもそも、まだ外国人との意思疎通もスムーズではなかった時代に、彼らのような蜜月関係が成立し、国や人種を超えて美しいものへ共感があったという事実は、私たち設計者に感動と勇気を与えてくれています。

